

職務に忠実なる中  
年軍人が  
島若務ら  
かき脱者  
ら医者と  
共なるに  
荷物整理  
して

# 総員、乗艦セヨ。

脚本 ビリー・ケン

登場人物

風見長閑（43）：襲国軍、海軍大尉。

若菜直（20）：襲国軍、軍医少尉。

礮岩哲也（54）：襲国軍、海軍中佐。

一森剛（38）：襲国軍、海軍曹長。

仁林：同右

三木：同右

鈴木：同右

○ 港、夜

鈴木

風見

○ 司令部、翌朝、

簡素な泊地。岸壁を波が洗う。魚雷艇  
 の前で海兵が敬礼を交わす。風見長閑  
 大尉（43）は鈴木曹長を見つめる。  
 敵艦を沈め、心配せんで下さい。見事、  
 鈴木が笑顔を。舷梯を昇り乗艦する  
 帰つて来る。責任におはなかつた。彼が

風見

風見

風見

風見

風見

風見

風見

風見

石造りの平屋の建物。木製の表札に“襲  
 国軍第54駆逐隊司令部”の文字。  
 内面には暗号通信機が置かれていた。  
 壁面に掛けた椅子に座る司令官、磯岩  
 風見も佐藤掛椅子に直立して敬礼。磯岩  
 哲也の中佐（54）は成功裡に終わりまし  
 先作戦は成功裡に終わりまし。磯岩  
 荒武者隊の伝統に恥じぬ活躍ぶり  
 だ。今後も犠牲も多くありませう。魚雷  
 艇4隻が失われ、温存して作戦に支障が  
 不要官の消耗も激しく作戦に支障が  
 ありませう。：戦線を下げざるべきかと  
 我々の勇猛さで海域に圧力を加えない。  
 畜力のポット軍に出血を強いる。小兵  
 で大果を挙げ、荒武者の常だ。小兵  
 しかし判断は不要だ。死守が我々に下  
 された。鳴り、通信文が吐き出される。  
 ベルが鳴り、通信文が吐き出される。  
 磯岩、通信機に向かい紙を取って読む。  
 相対的に突出しているらしい。防衛線  
 を引き直す。君が準備を指揮しろ。進  
 が下つた。君が準備を指揮しろ。進

風見 敬礼するはっ

○司令部前、野外

風見 「砂地の道の上。風見、部下の一森（3  
8）、仁林、三木、各曹長を招集する。3  
業風見中隊は駆逐艦への物資集積作  
業を行うこと。我が責任に置いて命  
じますす。各員は小隊長として現場で  
業を進めて下さい。向かう。若菜、食  
4人、敬礼をしないで。向かう。若菜、食  
道中、一森が木陰でひっそりと、  
入るように森が木陰で読む。軍医、若菜、直少  
尉（20）を見つめる。若菜、直少

一 若菜 「しながら直立敬礼。書物を後ろ手に隠  
若菜、跳び上がる。書物を後ろ手に隠  
尉だれかっ！」

一 若菜 「（肩の赤十字を睨みます！）「軍医だ  
な？こんなところ。何してる？」

一 若菜 「不審な奴め。さ。は。持ち場から逃げ  
た？逃亡兵は銃殺が規則だぞ！」

風見 「若菜、曹長、規則と云うなら彼は少尉  
で。森曹長、規則と云うなら彼は少尉  
一 兵学出の青二才は嫌いでありませう」

一 風見 「曹長、失礼しました。若菜少尉殿！」  
一 風見 「皆さんに紹介が遅れました。若菜直  
少尉です。陸軍教官には中隊を運用す  
る時、隊付衛生兵を一名付けるべし、  
とあります。合流予定だったのです」

風見 「若菜、眉根を寄せる。風見、片目瞑り。  
「それでいい？少尉。本日中の任務で」

風見 「い、はい。そうです。よろしくお願  
いします。」

風見 「若菜、はい。そうです。よろしくお願  
いします。」

○港

若菜 風見

三木 風見

若菜 風見

若菜

○港、

風見

風見、若菜を連れて波止場に腰掛ける。

「宿舎に帰って行く。そろぞろ

1700時

「担いで司令部へ」とこ駆けて行く。

「せん。司令部に支持を仰ぎに行きます」

「大尉！軍旗はどうすべきですか！」

「今のも！と敬礼。踵を返して行く。」

「三木曹長は猫伍長の飼育を引き続

「三木がやってくる。敬礼。」

「よ。指揮系統の徹底、命令を下し、遵

「け。ないんですか？子供みたいですよ」

「先で分隊長に指示をしている。」

「互いに敬礼。一森、踵を返して行く。」

「仰ぐ。風見、指さして集積場所を指示を

「指揮所で全体を見ている。」

「風見と若菜は簡素な机で拵えた臨時

「作業者が行う風見中隊の面々。」

「人々や機械が活発に動いている。」





「掃海作戦って、どういうのです？」  
「はっ！機雷は水中に係維策で繋が  
れていてるのですが、こちらはその策を  
船上から垂らした掃海策で切断し、機  
雷本体を海上に露出させ爆破する物  
であります！ウミの人間は潮干狩り  
と呼んでおります！」  
「それをごん小々な船でやるんで  
すか？危険なんじゃないですか？」  
「積み込み終わりました！」  
「結構」  
「他に方法は無いんですか？」  
「我々には専門の部隊ではないので、装  
備は最低限なものです。それに撤退作戦  
は明日。時間をあまりありません」  
「地雷原を歩く様なものでしょう？」  
「敵の狙いは駆逐艦です。設定深度も  
爆破方式もそれは合わせています。ご  
く小型の木造船は探知されません。あな  
たの思うような危険はありませんよ」  
「嘘ですよね？」  
「本当です」  
「自殺行為だ」  
「荒武者は死を恐れない。それが伝統  
です。命令が下った以上、やるのです。  
我々だけが逃げるわけにはいかない」  
「逃げているだけじゃありませんか！？」  
「荒武者は勇敢なじゃないですか！？」  
「臆病者が死んで行ったんだ！」  
「森、言葉を飲む。風見が若菜を殴り  
飛ばしたままの体勢で戦慄している。  
……強く殴り過ぎました。一森曹長、  
任務を言い渡します」  
「はっ、潮干狩りに行って参ります」  
「違いませぬ。あなたが行きます」  
「尉の介抱を。掃海は私が行きます」  
「大尉自ら……？指令からの命令で？」

風見 一 森 見  
「我が責任において、の命令です」  
「風見大尉：」  
「尉官が部下を見捨てて死ぬわけに  
はいきません。私は必ず戻ります」  
風見、森、敬礼を交わす。

○ 司令室 2100

風見 磯岩 見  
「直立敬礼の腕からピッと水が飛び込む。  
の軍服に染みを作る。無事完了しました」  
「掃海任務、無事完了しました」  
「結構撤退作戦は失敗します。大規  
模に攻勢、付随する閉塞作戦。敵は明ら  
かに近く、伏す所です。刈り取られるでし  
よう。降伏すべきです」

風見 磯岩 見  
「荒武者らしからぬ意見だ。臆病者め」  
「無意味に死ぬわけにはいきません」  
「次の戦場があるのだ。本部は収容作  
戦を行おうと言っている。心配はいらん」  
「：ならば、希望者だけ島に残る自由  
を下さい」  
「抗命に敵前逃亡か。面白い。だが許  
可しよ。臆病者は荒武者に不要だ。」  
カ軍に擲り殺されるがいい」

○ 翌日の朝、港

風見 一 森 見  
「駆逐艦が行く。駆逐隊旗が水平線に消  
え。爆薬で特大火柱が水平線に上がる。  
料壁で眺める風見中隊。  
「岸壁で眺める風見中隊。  
「援護がある」と聞いてましたか？」  
「栄光の荒武者隊も、大局上は駆逐艦  
と魚雷艇の木っ端部隊にすぎない。そ  
ういふことだったのですよ：」

若菜 見  
「昨日は言い過ぎました。すいません」  
「おかげであの船に乗らずに済まない」  
「

一 森  
見 降伏は、上手く行きませうか？  
「わかりませんが、備えませう？」

若 菜  
上陸してくるカ軍。  
風見、一森、敷布製の白旗を掲げる。  
「（カ語で）我々は降伏する。条約に  
基づき正式な捕虜の扱いを要求する」

○カボット国、捕虜収容所。談話室

若 菜  
「カ軍兵が何やら言う。妻に送る。ありがとう。」  
風見、カ軍兵の似顔絵を描いて渡す。  
「喜んで貰えて幸いです、と伝え下さい」  
若菜、通訳。カ軍兵は笑顔で去って行  
き、次の兵が来る。  
風見、また似顔絵を描く。